

今年度もオンデマンドで「保育を支える思想と哲学」という講座を受講しました。これは東京にある「子どもの文化学校」というところの主催で、さまざまな講座が開講されているのですが、コロナ禍にオンデマンドでも受けられる講座が開講されるようになったため、地方にいても参加することができるようになったものがいくつかあります。そのなかでも、私が受講したこの講座は、当園の毎月の園内研修にZoomで参加して下さっている東洋英和女学院大学の塩崎美穂先生や、琉球大学の岡花祈一郎先生を含め、福島大学の宮野勇雄先生、山梨大学の加藤繁美先生などなど、私が尊敬する先生方のオムニバス形式の講座です。

先日の講座は、昨年、当園にも来園された神戸大学の赤木和重先生の話でした。以前にも何度かこの「からたち」でご紹介しておりますが、赤木さんはもともと発達心理学が専門で、障害のある子どもの発達やインクルーシブ教育等を研究されていらっしゃる方です。その講座のなかで、これは大事にしたいなと私が思ったことをエピソードとともにご紹介したいと思います。

ある特別支援学校の先生が肢体不自由児の排泄介助の場面で、個室トイレに入る際に、わざわざ後ろ向きになって「透明人間、入りませーす！」と声をかけながら入っていったという話。小さい子や障害のある子どもたちも、排泄の場面や下半身を見られるのは恥ずかしいと思っているはず、でも肢体不自由のある子どもたちは、その障害のために排泄の介助を受けざるを得ない。先生はそんな子どもの悲しみを理解したいと思ったのでしょう。しかし、「つらいね・・・」とまともに声をかけると、その子は余計につらくなってしまいかもしれない。そこで、「リスペクトとユーモア」を持ってそのような言葉を発したのではないだろうか。

また、こだわりの強い子、少しの失敗でも気になってパニックになってしまうような子が、昼食のスパゲティをこぼしてしまったとき、あなたならどんな言葉をかけますか？・・・人によっては、その子のためと思って注意したつもりでも、その子が傷ついてしまうような言葉をかけてしまうことがあるかもしれません。あるいは、あら、「こぼれちゃって残念ね～、つらかったね～」などと、その子の気持ちを大切にすぎ、かえって深刻になりすぎてしまうケースも考えられます。

赤木さんが紹介されたのは、(赤木さんご本人がかけた言葉ではありません)「チャールズ皇太子もスパゲティは落とすんやよ！」(笑)・・・なぜ、突然チャールズ皇太子が出てきたのかは不明ですが、またそれですべてが解決する言葉がけだったのかは不明ですが、その先生の子どもに対するリスペクトとユーモアが感じられます。

この2つの事例とも、深刻になりすぎることなく、「まあ、人生いろいろあるけど、楽しくやってみよう」という前向きなメッセージとして子どもたちに伝えたかったんじゃないかと。



もうひとつ、赤木さんが家族と一緒にアメリカで過ごしておられた時のエピソードで、入学式の記念写真を撮る際、赤木さんの娘さんは、知らない環境、知らない人達の中で顔を出すことができず、肩しか見えていないような状況だったとのこと。赤木さんは親として「1秒でいいから顔を出して！」と声をかけたそうなのですが、アメリカの先生は「肩が見えてるから何の問題もないよ！」とジョークを交えて声をかけて下さったとのこと。それによって、赤木さん親子は安心できたとともに、「この学校なら大丈夫」と思ったというエピソードでした。

どんな相手であっても、一人の人間としてリスペクトは必要。リスペクトだけでも十分かもしれないけど、ちょっと楽しくないかも。またユーモアだけだと「いじり」「茶化し」になってしまうこともあり、相手を傷つけてしまうかもしれない。リスペクトとユーモアがあれば、子どもたちは安心して、楽しくなる。そうすれば、子どもたちは自ら動き出すのでは？とのこと。本当にそうだなあと思いました。

「リスペクトとユーモア」をいつも心に留めて言葉をかけていきたいと思います。